

なぜ感性教育は大学生の人格発達を 促進するのか

小 林 隆 児

Why does Sensibility Education Promote
Personality Development of University Students?

Ryuji Kobayashi

この数年間、私は学部生、大学院生、社会人などを対象に感性教育を試みてきた。そのなかで感性教育での最大の目的である自己理解を通じた他者理解が深まるためには、少人数での対話が不可欠であることが明らかとなった。

今回初めて、学部（3年）の「専門演習」で少人数を対象に、毎週1回1年半（計45コマ）の長期にわたる感性教育を実施する機会を得た。そこで学生たちがどのような体験をしたか、これまでの試みと比較検討した。その結果、人間の観察力がついたことを多くの学生が報告するとともに、それが日頃の対人関係にも影響を及ぼし、自らの人格の発達と成長を実感として語る学生が多くを占めた。なぜ感性教育が彼らの人格発達にまで影響を及ぼすほどの力を持つのか、自己理解と他者理解との関連から考察した。

はじめに

もともと私が感性教育を試みようとした大きな動機は、臨床力を高めるためには、専門知識の習得以上に自己理解を深めることが重要であるという気づきであった（小林、2017b、p.2）。他者のこころのありようを理解するためには、他者のこころの動きが自らのこころに響き、それを通して自らのこころの理解を深めることが必須である。そのような体験を通して、他者理解は深まるもの

である。そこで私が考えたのが感性教育である。

この数年間、私は学部生、大学院生、社会人などを対象に、機会あるごとに感性教育を試みてきた（小林、2016a、2017a、2017b、2017c、2018a、2018b、2019a、2019b）が、実施方法は条件の制約から回数、頻度など様々であった。具体的には、学部生を対象に、4年生毎週1コマ（90分）半期計15コマ（小林、2016a、2017a、2017b、2018b）、4年生毎週1コマ通年計30コマ（小林、2017a）、1年生毎週計7コマ（小林、2019a）、あるいは大学院生を対象に、本学で毎週1コマ半期計15コマ（小林、2017b）、他大学の集中講義で毎日5コマ3日間計15コマ（小林、2017b、2018a）、さらには社会人対象の講座で1日計5コマ（小林、2018d、2018e）などであった。

こうして感性教育を積み重ねていく中で、自己理解を通じた他者理解が深まるためには、少人数での対話が不可欠であることを痛感した。そんな手応えを強く実感したのは、いくつかの大学で大学院生を対象に集中講義形式で感性教育を実施した時であった。そこでは大半の学生たちは異口同音に、自らの幼少期の「甘え」体験にまつわる記憶が賦活化され、衝撃的な体験であったことが語られている（小林、2017b、2017c、2018a）。このような体験は他大学大学院での3日間の集中講義という強行日程によってはじめて生まれるものであって、毎週1コマの半期15コマの講義形式では、これほどまでのインパクトはもたらしてこなかった。自らのアンビヴァレンスに気づくためには、集中的な取り組みが必要で、そうでなければ、どうしてもそれに目を背けて蓋をしようとする無意識の心理的防衛機制が働きがちになるからである。

I. 研究目的

本学でも大学院のみならず学部でも様々な条件のもとに感性教育を試みてきたが、少人数のゼミではこれまでその実施期間は長くても1年間であった。

昨年度カリキュラムの変更に伴い、当該学部学科のゼミが3年次後期から4年次通年の1年半の期間に変更となった。そこでこの機会に初めての試みとして1年半感性教育を実施した。そこで学生たちが感性教育でどのような体験をしたのか、これまでの試みと比較しながら検証することにした。

Ⅱ. 研究方法

1. 実施方法

今回実施したのは学部（3年次後期から4年次通年）の「専門演習」の科目で、毎週1回1年半計45コマの長期にわたった。

進行はこれまでの感性教育の方法（小林、2017b、pp.5-14）に準拠して実施した。

初回は自己紹介、次回はガイダンスを実施した。なお、毎週1コマ90分という制約があるため、一つの事例の供覧に約20分、感想をまとめるために15分程度、そして残りの時間を各自の発表と討論に充てることを原則としたが、それでは十分な討論ができないが多かったため、次週までに各自の感想を再度文章にまとめるとともに、討論で考えたことをそれに加筆するように宿題として課し、次週に臨むように指示した。その結果、一つの事例を十分に吟味するためには2コマの時間を要することが多かった。ついで、1年後と1年半後にそれまでの経験について各自自由に感想を述べ合う時間帯を1コマ設けた。

2. 供覧事例

今回は1年半という長期間の実施であったため、可能な限り多くの事例を年齢順に供覧して、加齢とともに関係の様相がいかように変化するか、理解が深まるように工夫した。実際に供覧した事例¹は、順番に1歳台3例（事例2、3、4）、2歳台8例（事例9、10、11、12、15、16、17、18）の計11例である。

なお、このように年齢順に供覧したのは、加齢を経てアンビヴァレンスへの対処行動がどのように変容していくか、理解が促進されると考えたからである。供覧事例と各々が示す多様なアンビヴァレンスへの対処行動との関係は表1に示す。

¹ 事例の番号は拙著『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』（小林、2014）のそれに準じている。

表 1：幼児期に見られるアンビヴァレンスへの多様な対処行動

- | |
|---|
| <p>(1) 発達障碍に発展するもの</p> <p>①母親に近寄ることができず、母親の顔色を気にしながらも離れて動き回る（事例 10）</p> <p>②母親を回避し、一人で同じことを繰り返す（事例 9）</p> <p>③何でも一人でやろうとする、過度に自立的に振る舞う</p> <p>④ことさら相手の嫌がることをして相手の関心を引く（事例 12、16）</p> <p>(2) 心身症・神経症的病態に発展するもの</p> <p>①母親の意向に合わせることで認めてもらう（事例 15、18）</p> <p>(3) 操作的対人態度、あるいは人格障碍に発展するもの</p> <p>①母親に気に入られようとする</p> <p>②母親の前であからさまに他人に甘えてみせる</p> <p>(4) 解離に発展するもの</p> <p>①他のものに注意、関心をそらす</p> <p>(5) 精神病的病態に発展するもの</p> <p>①過度に従順に振る舞う</p> <p>②明確な対処法を見出すことができず周囲に圧倒される（事例 11）</p> <p>③周囲を無視するようにして一人で悦に入る（事例 17）</p> <p>④一人空想の世界に没入する</p> |
|---|

（小林、2016b、p.9 の表 1 に加筆）

3. 対話を進めるにあたっての留意事項

この試みを実施する際、参加者には以下の諸点を十分に理解することを求めた。感性教育の内容（小林、2017b、pp.12-13）に準拠したが、重要なので再掲する。

- ①発表者は自分の感じたことを率直に述べるのが大切であって、けっして正しい答えが要求されているわけではないことを認識しておくこと。
- ②したがって、聴く側も発表者の発言内容をしっかりと受け止め、分かりにくいところがあれば、その点を訊ね合うことによって、発表者の意図するところをよりよく理解できるように努めること。
- ③全員の発表を聴いた後、相互の感想で異なったところを確認し合い、その相違がなぜ生じたのかを相互に比較しながら考えていくこと。
- ④以上の作業を通して、対象である母子双方のこころの動きをさらに深く理解する可能性を発見し、確かめ合うこと。

この試みでもっとも大切なことは、客観的で正しい観察方法があるわけでは

なく、何をいかに観察するかという作業は、自分自身の対象への関心のあり方や価値観という自己の内面の特徴によって大きく左右されることを体感することである。このことによって自己理解が深まり、その結果として他者を観察し理解するための感性がより深まることが期待されるからである。

本試みが実り豊かなものになるか否かは、対象学生に先述した諸点の共通理解を図った上で、いかに学生の内面を率直に引き出すことができるか、その話し合いの進め方にかかっている。よって進行役はこの試みの責任者である私（小林）が担当した。

観察するビデオの内容は、乳幼児の母子交流の場面であるが、その内実は話しことばのほとんどないコミュニケーションである。それを観察して理解するプロセスは、観察者自身の感性に委ねられる部分が多い。そこで体験される対人理解は自分の内面で感じたことを通した理解、つまりは自己理解という側面が強い。私が目標としたのは、対象学生が各々自分で感じたことを率直に語り合い、そこで生じた相互の共通点あるいは相違点がなぜ生まれたのか、その背景要因を語り合う中で、他者理解がいかに自己理解と深く繋がっているかを体感することにある。

よってこの試みは、学生自身が他者理解を試みる中で、いかに自己理解が関係しているかということに気づき、それを通して自己発見を体感することだということもできよう。

4. 倫理的配慮

これまでの感性教育の方法（小林、2017b、pp.13-14）に準拠した。

Ⅲ. 研究対象

2017（平成29）年度後期から2018（平成30）年度前期と後期の計1年半、私の担当した「専門演習」を履修した学部生（開始当時3年）計7名（男女比5/2：A子、B男、C男、D男、E子、F男、G男）である。

なお、この期間、学生たちは就職活動で忙しく、大半の学生はそのためになくとも数回は欠席せざるを得なかったが、欠席した際にも次回に再度同一事

例を供覧することによって、全員が共通認識のもとに演習に参加できるように配慮した。

IV. 研究結果

1年後、ついで1年半後の最終回到全体を振り返ってこの演習が自分にとっていかなる体験となったかを、率直に、感じるままに、それにふさわしいタイトルをつけてまとめるように指示した。その結果は以下の通りである。

なお、1年半の最終回到、演習の中で各自感想を述べ合ったが、レポートにはその際に感じ考えたことを付記した学生が2名いたので、そのまま掲載する。

1. 1年後の体験レポート

「見て、聞いて、話して」

A子

私たちは約1年間、皆で同じ映像を見て、多くの議論を重ねてきました。最初は自分と全く違う意見もあつたりして驚くことも多かったです。今では皆の意見を聞いて、違う意見であっても、同じ意見であっても、なぜそのように思ったのか、皆の考えを聞くことに楽しさを感じるようになりました。私自身も、自分が思ったことをできるだけ詳細に伝えていきたいと思うようになり、皆の前で話すことを繰り返していった結果、最初の頃よりも、上手く伝えることができるようになってきたのではないかと感じています。まだまだ至らない点も多くありますが、この1年間のゼミで得たものを活かしながら、後期の講義にも積極的に参加していきたいと思っています。

4年生になってからのゼミでは、3年生の頃と映像を見る視点が変わったなと思いました。最初の頃は、映像を見るたび、私は母親の方に焦点を当てて観察することが多かったです。「この母親、子どもに対してもっとこう接したら良いのに」「この母親は頑張っているのが見えてもとってもわかるのだけれど…」など、とにかく母親の方に注目し、母親の接し方が子どもに与えている影響などについて考えることが多かったです。当時はなぜ母親のことばかり見

ていたのかというと、自分に子ども側の気持ちを、想像することが至難の業に思っていたからです。私は家族の中では末っ子で、親戚の中でも下から二番目で、とにかく自分より一回りも二回りも歳が離れている子どもの生態が全然分からずにいました。だから、子ども側に立つのではなく、比較的気持ちが分かりそうな母親側にばかり立っていたのだと思います。

しかし4年生からは、子どもの方に焦点を当てて映像を見ることが多くなりました。その理由は、自分の幼少期のことを少しずつ思い出すようになってきたからだと考えています。最初は「自分がこの事例の子どもだったら何を思うだろうか」という客観的な見方から始まったものですが、映像を見ていくと「私も母親にこのようなことをされたことがある」と自分の幼少期のことを思い出すようになり、そこから、子どもに注目していくことが増えました。母親だけでなく子どもにも焦点を当てることが少しずつできるようになり、映像を読み取る力がまた少しついてきたのではないかと考えています。

ゼミのメンバー全員が揃うことはなかなか無いことですが、その瞬間に集まっているメンバーで、そのメンバーだから見つけることのできる親子の実態や可能性などを、これからも話していき、質の良い議論を重ねていきたいです。そして、社会人になるまでに、話す力をもっと身に付けていきたいと思っています。

<コメント>

全体を通して、とても素直に自分自身の体験を振り返って語っていることに好印象を持つ内容である。同じ対象事例を観察するなかで、多様な意見(感想)が交換されてきたが、自分と異なる意見が発言されても、その根拠を語り合うなかで、相互に理解が深まることが楽しみとなり、喜びとなっていることが見て取れる。とりわけ強調されているのは、ものを見る際に多様な視点を持つことができるようになったことだと、実感として語られている。そして、そうした変化を体験するなかで、自分自身の幼少期の体験が想起されるようになり、それが親子を観察する上で、大きな力となっていることがわかる。

ここに語られている内容は、私が感性教育で目指している第一の目標といってもよいものである。

「前期のゼミを振り返って」

B男

このゼミの前期での活動を通して大いに実感したことは、一つのビデオについて議論するだけでも人によって感じ方や考え方の違いが大きく表れてくるということ、そして自分が感じたこと、考えていることを人に対して分かりやすく伝える力の大切さです。

一つの母親と子どもの新奇場面法を観察するときも、初めに感じる親子間の違和感や印象が、自分が感じた通りのことをみんなが考えている時もあれば、また違う感じ方を持つ人もいたり、ゼミメンバーの中でも様々でその違いがあったからこそ面白い議論ができたのではないかと考えています。母子関係の大まかな印象がみんな同じ場合でも、そこから子どもや母親に具体的に視点を向けて議論をしていくと、グループのなかでもどう洞察しているかが一人ひとり違い、グループのメンバーが日ごろどう考えて過ごしているか、どんな感性を持って生活しているかなど、ゼミ生一人ひとりの人間性なども始めの頃よりは理解ができてきたなと感じています。

またこれまでの自分の母子関係の観察の仕方を振り返ってみると、よく最初は子どもや母親どちらか一方目立つ方に注目し、そこにとらわれがちだったなと感じています。今期では自分なりのその偏りから抜けようと思い、できるだけ親子全体を通した印象を言葉にしようと努力しました。

しかし、まだその親子の印象をいざ表現してみると言われると言葉に詰まってしまうのが自分の課題で、そこを早く的確に答えるようになることが来期の目標です。

日ごろからその訓練を心がけなければならないゼミを通して実感する機会になったので良かったです。

そして、このゼミではビデオについて議論するだけではなく、時折設けられるフリートークの時間でゼミ生同士で、ある意味「ぶっちゃけた」話をするのができて、そこで日頃何をしているか、話し合ったり就活についての話で刺激をもらったりと、周りと自分を比較できる有意義なトークができたと感じています。

また、普段緊張感のある議論中では出なかったような本音が出ることもあったり、それで「確かに」と感じるような経験もあり、フリートークの時間は貴重なものだったのではないかと今になって実感します。

今期のゼミでは3年後期、4年前期とゼミを続けてきて、ゼミメンバーの仲も深まって、いいメンバーだなと感じることができていることを自分は嬉しく感じています。来期ではこれまでよりもこのメンバーで弾みのある議論が行えるように自分も成長していきたいです。

<コメント>

ここでも同様に、人によってももの見方が異なることを実感するとともに、そのことへの興味や関心が高まっていることがうかがわれる。

興味深いことに、B男では、特に印象的なこととして語っているのが、ゼミのメンバーへの理解が深まってきたことだという。おそらくは日頃の大学生活でなかなか味わえない、互いに自分の感じ考えたことを自由に語り合うという体験の面白さを積み重ねていくなかで、彼にとってそれがとても新鮮で喜びとなっていることが伝わってくる内容である。

「ステップアップ」

C男

私は1年間を通して、2つ大きく変わったことがあると考える。

1つは、ゼミの輪に関することである。大学生活と通じてもともと仲が良かった者、あまり接する機会のなかった者がいると思うが、私たちのゼミも同じようなことが言える。仲の良い者とは発言の距離も近ければ良いディスカッションになるが、あまり接したことがない者であれば、ある程度のラインを到達点とし、それ以上に広がることがない場合が多いと考える。しかし約1年間ビデオを見る、これに関してのディスカッションを行う、といったように話し合いの機会を増やすことで結果的により多くの答えに触れることが出来るようになったと感じている。

2つ目は、講義のビデオに関することである。大前提として、完璧な答えというものは1つに限ったものではなく、一人ひとりの意見、発言がより多くの

ヒントを持っているものと考えている。しかし、いつであったか詳しく覚えていないが、先生の言葉が誘導を含んでいると自身が感じてしまったことがある。以降、自身は発言自体や講義に対して消極的になっていた部分があったと考える。前述のとおり、一人ひとりの発言、表現が新たな気づき、ヒントを持ち合わせていると考えているため、丁寧に、大切に扱うことが重要であると考ええる。また他のゼミのメンバーまで消極的になってしまっはいけないため、ディスカッションのしやすい環境づくりも重要であると感じた。

1年間の中で、多くの講義ビデオを見た。自身も多くの学びを得た。しかし、及第点がわからない。そのため前年度の先輩方はこのような考え方や気づきがあったなど、比較であったり、またゼミ自体の大々的なテーマをもう一度話す機会があればいいかと考える。

<コメント>

この1年間、ゼミのメンバーのなかでただ一人、この形式に馴染めないものを感じていた学生である。その最大の理由は、C男自身が語っている「及第点がわからない」ことであったようだ。

これまでとくに学部生を対象に感性教育を試みるなかで、正解がわからないことへの戸惑いは誰でも大なり小なり認められたが、この1年間最後までこの種の戸惑いが続いている。その契機となったのか、「先生の言葉が誘導を含んでいると自身が感じてしまった」ことのようなのである。私は学生たちの発言に対して、その意図、思い、などを可能な限り引き出せるように心がけているが、ときに私の問いが相手を「誘導」しているように感じられたということは、それだけ自分の何かを守ろうとしていたということなのであろうかと、私は想像するのだが、これまでにもこのような反応を示した学生は少数ながら存在していることは確かである。

感性教育のように、自分自身が感じたままに正直に語ることはだれにとっても優しいことではないことは、体験してみればよくわかる。それは、自分自身の無意識が刺激されるからである。自分のころのなかを探られるような思いを体験することも大いにありうる。これまでその点は最大限留意しながら実施してきたつもりではあるが、なかなか難しいもだと改めて実感させられた。

「1年間を振り返って」

D男

今回、1年間を振り返って、私が感じたことは、ビデオ映像を見るときに全体を見るようになったということを実感した。

ゼミが始まって最初の頃は、発達障害の子どもというテーマだったからか、どうしても子どもだけの方に意識が集中することが多かった。そのためタイトルも子どもだけを中心にまとめることが多かった。しかし、ビデオ映像を繰り返し見ていると、子どもだけではなく、母親の方にも大きな特徴があるということを感じた。そこで4年生になった頃からは、子どもだけではなく、母親の方にも意識を集中することを心がけた。すると、その親子の様子や特徴がより鮮明に見えるようになった。

たとえば、絵を殴り書きするのが印象的だった子どもの事例（事例09）では、子どもだけに意識を集中すると単純に母親に無関心な子どもだという印象を持った。しかし、母親の方にも視点を当てると、母親は子どもを見てはいるもの子どもに語りかけることもなければ、何か一緒に遊ぶ様子もないという大きな特徴があった。この特徴も考慮すると、この事例の子どもは絵を殴り書きすることによって寂しさを紛らわしている。つまり、母親のことを意識した行動を子どもはとっているのだという印象に変化した。

このように部分的に意識を集中する時と全体に意識を集中する時では見え方が大きく変わるということをこの1年間で実感した。

また自分ではこれで間違いないと感じたことも、他の人は全く異なる見方をしていたということもこの1年間で実感したことである。他の人が自分と全く同じビデオ映像を見ても自分では出てこないような感想をよく聞いた。しかし、他の人の考えを聞いてみると、確かにそのような見方もできるなど納得できるものが多かった（中にはそれは絶対違うだろうというものもあったが）。

見ている人が違うと同じビデオ映像を見たとしても、見方や考え方、感じ方が人によって全く異なっているというものを実感した。そのため自分一人の意見も大事であるが、他の人の意見や考えを聞くことによって視野は大きく広がると感じた。

このように、1年間では、他の人と議論する、これまで見落としていた部分も見ることによって大きく視野が広がるということを学んだ。

<コメント>

視点を変えることでもの見方が大きく異なることを実感したことが喜びをもって語られていることがとてもよく伝わってくる内容である。好ましいのは、そのような体験が具体的に語られていることである。自分自身の体験を自由に述べるができるようになった証である。

ゼミの開始当初、D男は自分を守ろうとして、自分の考え方に執着していたというが、率直に思いを語り合うゼミを通して、同じ対象を観察しても人によってももの見方が異なることを発見すると同時に、その根拠を聞いていくと、確かにそうだと納得できることの体験をしている。

「自分一人の意見も大事であるが、他の人の意見や考えを聞くことによって視野は大きく広がる」体験を通して、これまでの他者に対して強い警戒的な構えを見せていたD男であったが、ゼミへの参加を重ねるなかで、次第にそれが薄れていったことが私には手に取るようにわかった大きな喜びである。

「違う意見のぶつかり合い」

E子

1年間のゼミを通して、私は自分と違う意見、違う考え方をもつ人たちと議論することでかなり視野が広がったと実感した。発表を聞くと、同じことに対してもみんなそれぞれ違うところを見ていて、自分が見落としていたところや考えたこともないことをいつも気づかされる。大学では少人数の授業も少なく、このように人の考え方をシェアしあう授業もないし、同じ事例でも毎回の議論はいつも新しい内容があって、一年間ずっと面白かった。

また、みんなで議論する事例も3年生の後期のゼミに比べてより難しい事例になり、いろいろな形の母子関係、その中の葛藤を見ることができた。子どもでもいろいろな思いが心の中であって、それを素直に伝えるすべがなく、無意識に表情や声、または大人から見ると「変な行動」をしてしまうこともわかった。それを短い映像の中で他の学生とそれぞれ気づいたことを話し合い、その子の

思いが一番近いものを見つけ出す。人の思うことはその人でないとわからないし、正解がないからこそどんな意見でも当てはまる可能性があって、どの意見も絶対正解とは言えないし、否定もできないから、ある意味今勉強しているものの中で一番難しい授業だと感じる。

私は、3年生の後期のゼミの時より子どもの気持ちを考えるようになったと思う。最初は「親子だから最終的には仲良くなる」とい先入観を持って、何でも大したことないと思ってしまい、発表の内容もつい薄くなっていた。しかしより多くの事例を見て、他の人の話を聞いていくうちに、先入観を持って映像を見ると大事なことを見落としてしまうことに気づき、先入観を捨てて事例を見たら、より多くの情報が頭に入るようになった。同じことを授業だけではなく、これからの対人関係でもこの観察力を応用できるとも思った。残り半年間、さらに自分の観察力を磨き、話を聞いてもっといろんな視点で物事を見れるように目指したい。

<コメント>

他の学生と同様に、視野の広がりを実感しているが、それとともに重要な体験だと思われるのは、供覧事例の意味することをよくよく理解できるようになっていることである。それは、「子どもでもいろいろな思いを心の中にあって、それを素直に伝えるすべがなく、無意識に表情や声、または大人から見ると『変な行動』をしてしまう」こともわかったと述べているところである。母子に関係に立ち上がっているアンビヴァレントな思いを感じ取りつつ、子どもが母親に対していかなる態度を取っているかを、多くの事例を観察するなかで、実感をもって掴んでいることがよく伝わってくる内容である。私が感性教育の最終目標として掲げているものをE子は体得しつつあると思われる。

「これからの対人関係でもこの観察力を応用できるとも思った」のはどのようなことかを聞いてみたところ、E子はつぎのように語っている。「これまで他人は他人、別々と思っていたが、話し合うことによって同じかもしれないと思うようになった」と。

私はE子の語るのを聞いていて、このような対話を積み重ねていくことが人間の共通理解を目指す上で非常に重要な試みであるとの思いを強くした。

「前期（までの1年間）のゼミを終えて」

F男

今期も様々な事例をもとに、考察・意見交換をしてきましたが、人によって感じ方や意見は様々だなと思いました。

一見まったく同じように見えても、話を掘り下げていくと、実は違っていて、話していてとても面白いなと感じました。ここから、私は人の話に耳を傾け、しっかりとそれについて考えることの重要性を学びました。よく話をして、よく話を聞かないとわからないこと、伝わらないことがたくさんある、と感じました。

また、意見交換の際、言葉の使い方ひとつで伝わり方や受け取り方が大きく変わるんだな、と感じました。その中で、どの表現方法が適切なのかをみんなで話し合うシーンはとても楽しかったですし、私自身、表現方法の幅を広げるうえでとても良い勉強になったと感じています。実際、就職活動の面接に活かすことができたのも事実です。

また、4年生の前期ということもあり、就職活動中のメンバーがほとんどだったため、就職活動に対する考え方や取り組み方について意見を交わせたのも、私自身、良い刺激になったと思います。徐々にみんなの進路が固まり、全員がゼミに話に参加する機会が増えたことは、ゼミ全体を通して成長できたことかなと思います。

去年はどうしても少し一方通行になる場面もありましたが、4年生の前期に入り、全員が議論に参加する機会が非常に増えたように感じています。誰かと誰かが話をしている、という状況ではなく、全員が（一緒になって一つのことについて）話をしている、という状況を後期はもっと続けていけたらと感じています。

個人的なことを述べると、事例に対する見方が変わってきたなと感じています。これまでは、母親なら母親、子どもなら子ども、というようにどちらか一方にフォーカスしすぎていましたが、ここ最近はより客観的に全体を観察することができるようになってきたと思います。どちらかにフォーカスしすぎている時は、（感情）移入をしてしまったり、悪い方を批判的に捉えすぎてしまい、

しっかりとした判断ができなくなっていました。その結果、母親を批判的に見すぎてしまい、子どもの細かな様子に気がつかないことが多々ありました。

しかし、全体をより客観的に観察できるようになってからは、全体を通しての細かな動きを見ることができるようになり、視野が広がったように感じます。その結果、より良い議論につなげることができていると思います。

もう一点は、先入観を捨てることが大切だと感じました。最初から「あそこが悪い、ここが悪い」という先入観を持ってしまうと、事例を観察する際に全てをそこに結びつけてしまうため、しっかりとした観察ができないなと感じました。そこで（先生から言われた）「診断を出すことは重要ではない」という言葉の意味が理解できたような気がします。先入観や病名から入ってしまうと、「こうだからこう」というように客観的な視点が奪われてしまうという点に気づくことができたのは大きな成長かなと思います。人付き合いをしていく上でも重要な点になってくるのではないかと感じました。

<コメント>

この学生の体験談は、自分自身の体験過程を実に細やかにわかりやすく、正直に語っていて、読んでいて非常に感銘を受ける内容である。

まず取り上げているのが、各自の感想を聞いて、最初は同じようなものかと思っても、対話を積み重ねていくうちに、実は異なっていることに気づくとともに、そのような体験を面白いと感じたことを述べている。他者をより深く理解することができたことによる喜びをそこに見てとることができようが、このような体験こそ、感性教育で対話を重視することの成果といえよう。

ついで、同じ内容を観察しながら、ある場面をどのように表現すれば共通理解が深まるかを試みたことに対する非常に肯定的な評価がなされている。そのことからこの学生は表現することの難しさと同時に面白さをも体験していることがわかる。

この1年間で仲間同士が次第に共通の話題に対してともに自由に語り合う場になっていったことが喜びを持って述べられている。

最後に、先入観をもって観察することの危険性への気づきが述べられている。

全体を通して深い洞察が述べられ、学部生でもここまで深い気づきが生まれるのか、私はいい意味で驚きを禁じ得ない。

「着眼点の変化」

G男

この1年間のゼミを通して、私はビデオを見るときに注意を向けるところが変わったと思います。最初のころは、母親は子どもの行動だけを見ていて、それに対してのお互いの反応をタイトルにつけていました。しかし、小林先生の言うところの「物語」に少しだけ意識するようになったと思います。一連の流れを見て、前の場面と見比べることが大切なのだと気づくことができたため、このような変化があったのだと考えられます。

また、ゼミ全体を見て議論らしくなったところも個人的によかったと思います。全員が発言するような授業のない中で、等しく発言できているところが何となくうれいです。これは、自分の考えを言葉にする力や他者の話を聞く力が身についていることなのだろうと感じます。

残り半年ですが、先生やゼミメンバーの意見、考えを聞いて、さらに得るものがあればいいなと思っています。

<コメント>

私は事例を観察する際に、母子双方の関係を読み取るためには、両者間の立ち上がる情動（気持ち）を感じ取ることが大切であることを常に助言しているが、そうすることによって新奇場面法での20分間の母子交流にひとつのストーリー（物語）を読み取ることができるようになって考えているからである。このことをこの学生は掴み取ろうとしているのであろう。

感性教育では各自自分の思いを正直に語り合い、相手の発言の意図を理解するように努めるように助言しているが、そのことがこの学生にとってとても新鮮であると同時に、「自分の考えを言葉にする力や他者の話を聞く力が身についている」との実感を述べている。

2. 1年半後の体験レポート

「自分の中で変わったこと」

A子

ゼミに入ってから、約1年半経ちましたが、数多くのビデオを観て、皆と話し合うことを、本当にたくさん行いました。おかげさまで、最初の頃よりも、観察力や発言力が身に付いたと思います。その中で、私は特に、他人に自分の考えを伝えることが、このゼミに入る前よりもできるようになったと感じました。

ゼミでは、必ず自分の意見や気付いたこと等を皆に発言する機会があります。自分の声が小さかったり、言っている意味がよく分からなかったりすると、先生はそれをすぐに言葉にするので、尋ねられる前に、皆に伝わるように、聞き取れる音量で、分かりやすく、しかし、簡潔に言葉をまとめて発言することを心がけるようになりました。また、自分の意見を毎回必ず発言するので、「自分の意見」を言うことに躊躇しなくなりました。

以前の私は誰かに「自分の意見」を言うことにとても怯えていました。友人でも、家族でも、部活の仲間でも、自分が言いたいことは心の中に押し込めて、いつも相手に合わせていたことが多かったです。これは私の家庭環境等も関係しているのですが、とにかく、相手に迷惑をかけることや、相手を怒らせること等に怯えていたので、いつも相手の顔色や機嫌をうかがっていたように思います。だから、相手の意見に合わせて会話を進めることが多かったです。そのせいか、「昔からの友達」というのが少なく、薄っぺらな交友関係ばかり築いていたのだなと思いました。

しかし、ゼミで自分の意見を言う機会が増えて、私の意見に反対したり、理解できない、と言われてたりしたこともありましたが、私がなぜそのように考えたのかを説明すると、「理解はできないが納得はした」といったことがありました。そのときに、自分の全てを肯定されることが「受け入れられる」ことではないのだと、改めて気付いたような気がしました。つまり、相手に合わせて全てイエスマンでいることが本当の友人関係ではないのだと思いました。それから少しずつ、薄い友人からの頼み事を、自分が厳しかったら断るようになった

り、逆に私から何か頼むようなことをしたりするようになりました。その結果、関係が切れてしまった友人もいますが、私自身はとてもすっきりしました。これから社会人になる前に、「自分の意見を相手に伝える」という一見当たり前なこと気付いて、本当に良かったです。

ビデオでは、表から見たものが正しいとは限らない、ということ学びました。様々な親子の様子を観察しましたが、中には、一見普通の親子のようだったり、普通に仲が良さそうな親子もいたりしました。しかし、深く掘って行けば、表面からでは分からないような亀裂が親子に生じていました。物事を、ちょっと表面を見ただけで決めつけるのは良くないこと、ちゃんと自分が納得するまで調べてから判断することの大切さ等を、ビデオを通して深く学びなおしました。

<コメント>

自分の育ちを振り返りながら、自分自身の対人関係の取り方について率直に内省しながら、自分の気持ちに正直になることの大切さを体験していることが述べられている。これこそまさに感性教育の目指しているところである。

「人を見る目が深まった」

B男

私がこれまでの事例を見てきて自分自身変化を感じたなと思ったことは、人を見る目が深まったということである。普段の大学生活では基本的に人との関わりは特に仲が良い相手以外は表面上の付き合いにどうしてもなりがちで、自分以外の他人のことを熱心に考える機会というものが大学に入って希薄になりつつあったが、このゼミで全くの赤の他人である親子のやり取りを1年間以上かけて繰り返し見ていく内に、人は性格によって人間関係ががらんと変わっていくということに改めて気付かされた。母親と子どもを2人っきりにした状態では、子どもはやはり自分の置かれた環境にとっても敏感なため、母親の性格によってかなり左右されることが多かったと思う。それは自分の周りの知り合いや友人にも当てはめることができ、もしこの人が母親に、父親になったならこんな風になるのではないかと以前よりも予想がつきやすくなったのではないか

と感じている。また人間は一対一になった時に、その人物が他人に与える影響、本心など、その人間の本質が顕著に表れてくるものであるということ¹を改めて自分は理解できたと思うので、同時に自分もそのような場面で評価されているのだということ²を自覚して生きていかねばならないと実感した。

そして、最後の授業の時にはサークルの後輩の女の子と一時期恋愛関係に至ったというとても個人的な話をしてしまったのですが、その時の話をまとめようと思います。その後輩の女の子とは2年間ほど同じサークルとともに活動をしていたのですが、時々いきなり向こうからなんの前触れも無く連絡がくるのが何度かあり、その内容は基本的にサークル内における事務的な話題などが多かったと思います。そこから良く話が広がって世間話につながったりすることが多かったのですが、その当時は向こうが自分に気があるということも知らず、自分も話が長引くのはあまり好きではないので、日付が変わる頃には話を終わらせようとするのですが、自分との話を終わらせたくなかったからなのか、また次の日に新しい話題を持ちかけてくるのが多かったです。それから半年ほど経って自分がサークルの飲み会で久しぶりに酔ってしまった時があり、その後またその子から大丈夫だったか心配の連絡が来るのですが、そのやり取り中に向こうが自分に気があることを初めて知りました。その時は自分もメンタル的にどこか癒しを求めている部分があって正直付き合う選択肢もありかと思ひ、その方向で話していると付き合うのはまた違うと遠回しに言ったような言動が見られ、そこに自分も気付いたのでそれ以上交際するか否かについての話をしませんでした。おそらくその子は私よりもっと自立しており、フランクに言うとクールで大人びた人間なんだろうと認識、期待していたのだと思います。確かにその時は自分にも落ち度があって、人と付き合うという話を軽々しく進めてしまったことは、ほんとに甘かったなと痛感させられました。しかしそれから普通にその子とは顔を合わせても話すことはありますし、未だに度々いきなり連絡がくることもあります。おそらく深く関わるつもりはないけども気になるから表面上だけは関わっておきたいといった心理があるのではないかと思いました。このやり取りが授業で見た子どもが母親にしていた試し行動と同じような気がして、自分はおそらく無意識のうちに彼女に試されて

いたのではないかと実感しました。こうして話にしてみればただの個人的な恋愛経験談でしかないのですが、このゼミで勉強した観点から見てみれば色々と分かってくることも多かったので、良くも悪くも今の自分を客観視することができる良い機会になったと思いました。

<コメント>

この学生が述べている「人は性格によって人間関係ががらっと変わっていく」ことについて、具体的にゼミのなかで尋ねたところ、それは異性関係についてであった。ある女性が自分にさかんにアプローチをしかけてきていた。しばらくは反応しないで様子を見ていたが、あるとき好意的な反応を見せたところ、途端に彼女は自分に対して距離をとるように様変わりしたとのことであった。私はこの話を聞いて、供覧してきた母子関係すべてに認められた「あまのじゃく」としての独特な関係そのものをこの学生は体験して、実感として理解したのだと、いたく感心して聞いたものである。おそらくこの学生は以前であれば、このような体験をしてひどく困惑していたであろうが、ゼミの体験によって、今回の出来事を距離をもって捉えることが可能となり、人間理解の深まりを実感したのであろう。そんなことが伝わってくる内容である。

「人間観察・人間理解」

C男

ゼミの中で事例を観ることは、「人間観察・人間理解」に深く関わっていると考えている。人間観察とは、文字通り視覚で認識できる行動、しぐさ、雰囲気などから対象の情報を読み取るものである。人間理解に関して言えば、人間観察で得た情報を論理的に判断し、また感情を汲み取ることであると考えている。

前回のビデオの中では、子どもの行動、母親の行動に「なぜこういったことをするのか」という疑問を持ち、そして行動を論理的に考え、可能性であったりストーリーとして筋道を立ててみたり、と前述で触れたような「人間観察・人間理解」に近いものを感じる。

自身も事例を見続けたことで、初見でもなんとなく子どもであったり、母親

であったりの特徴に気づき自身が納得できるようなときもある。このようにゼミを行う上で「人間観察・人間理解」は深く関わっていると考えられる。

<コメント>

この学生は1年後の体験談として「及第点がわからない」との戸惑いを述べていた。その後の半年で、さほど大きな変化が認められていない。自分自身が内的にどのような体験をしたのかを実感をもって語る事が困難であることが見て取れる。正解は何か、このことへのとらわれがずっと根強く続いていたのであろう。残念でならない。

「異なる意見も視点を変えることで納得できる」

D男

1年半ゼミをやっていく中で私は人を観察する力がついたと感じた。それは日常生活においても実感できる。

ゼミを始める前は自分と考えが合わない人の意見は聞かない、もしくは聞き流すことが多かった。例えば、アルバイトで客がクレームを入れたときにも、とりあえずあしらうくらいのことしかしなかった。しかしゼミでの活動を通して、一見自分が共感できない意見も視点を変えることで納得できるということを実感した。アルバイトで客がクレームを入れた時に、少し違った考えをするよう意識するようになった。その結果、客の表情が180度変わったという事が起こった。社会の中で様々な視点で物事を見るということの大切さを学んだ。

またゼミでは最初は自分の意見が正しいかどうかを考えすぎるあまり、自分の意見や考えがあまり出せないということが多かった。しかしゼミでの議論を積み重ねていくうちに、正解はたくさんあるということに気づかされた。その結果、今でも考えることは多いが、自分の意見を全く出せないということとはなくなった。

様々な視点から見る。議論では正解がたくさんあるということが1年半ゼミを通して大きく学んだことであると感じた。またゼミを進めていくうちに、これから社会人になっていくのだという意識が芽生えた。そして時間を意識しなくてはならないということもゼミを通して学んだことであった。

4月からは社会人になるが、これまでのゼミでの活動は将来必ず役に立つと思っている。これまで学んだことを社会人になるうえで大切にしていきたいと思う。

<コメント>

この1年半でもっとも大きな変化を見せた学生である。当初は非常に警戒的な構えが強く、見るからに強い緊張を抱かせ、ゼミの最初の頃は遅刻が目立ち、少人数形式のゼミに参加することがとても苦痛であることは一目でわかるような学生であった。

しかし、D男はこのゼミで遅刻はしてもほとんど欠席することなく参加するなかで、貴重な体験をしたことがわかる。

当初自分を守ろうとして、自分の考え方に執着していたというが、率直に思いを語り合うゼミを通して、同じ対象を観察しても人によってももの見方が異なることの発見と同時に、逆に一見同じように思えても、よくよく語り合うと見方が異なっているのだという発見を味わっている。

一見すると同じことを言っているようであっても、よくよく話し合ってみると、違いを発見したり、その逆に一見すると違っているようにであっても、よくよく話し合ってみると、深いところで共通していることを発見する。

感性教育での対話でもっとも重視していることは、相手の発言内容を丁寧に尋ね合うことで、相互理解を深めることにあるが、そのことの成果がこの学生の体験談にとってもよく見て取れる。

それまで頑なまでに自分を守るため、相手の意見を排除しようとしてきた彼が、視点を換えることによって相手をよりよく理解することができるようになったことを実感をもって語っていることに、私は深い感銘を覚えた。彼の変容は感性教育の最大の成果の一つである。

「矛盾の塊」

E子

このゼミでこれまでたくさんの親子のビデオを見てきて、特に自分が日常生活で具体的に何かが変わったことはない。それでも今まで自分が人間に対して

抱いていた考えはおかしくないと思うようになった。人間は矛盾の塊ではないかと私は思う。自分の感情しかわからないので、今まではもしかしたらおかしいのは自分だけではないかと、矛盾だらけの自分に不安がありました。でも授業で、幼い子どもでも母親に対して矛盾した感情を行動で表しているのを見たり、母親が子どもの相談に来ているにも関わらず、無意識に良く見せようとしてしまうのを見て、誰でも人には矛盾していることはよくあるのだと思った。

しかし、ビデオの子どもたちのように、その矛盾した気持ちをあまりにも早く引き出される体験をしてしまうと、のちのち悪い影響をもたらすことがある。子どもが母親に対して、一緒にしてほしい気持ちがあるのに、自分のしたいことを抑えて母親の言う通りにしたり、それを諦めて自分ひとりで遊ぶようにしているのを見ると、このまま大人になれば、きっといつか今まで抑圧してきたものが爆発して、おかしくなったり、自分を見失ってしまいそうだと思う。

また、誰でも相反する気持ちを持つ時があることを知った今では、他の人に対して少し考え方に余裕ができたような気がする。これまで私には人と接するときいつも相手にどう思われているのが気になって仕方がなく、悪い方向に予想して勝手に落ち込む癖があったが、今は相手から本音かどうかわかりづらいことを言われても、「本人も自分の気持ちをよくわからないかもしれない」、あるいは「嫌と思っている一方で他の気持ちもあるかも」などと思うようになった。そう考えると、あまり相手が自分のことをどう思うのかを気にならなくなった。

授業後の感想

みんなからゼミを経験した後の自分の変わり様を聴き、二人での面談のような対話ではなかったけど、みんなのことを少し深く知ることができた気がする。7人で1年半一緒に感情について考えていくと、ゼミ以外で遊びに行ったり会話がなくても自然と気持ちが深くなっていると思う。そうでないと、自分の家のことや幼い頃の経験をそう簡単に語ることはできないと思う。また、みんなで見たビデオについて、最初の頃はみんなそれぞれ感じ方が違っていたが、最後の事例になると、各自の伝え方は違うが、感じたものは近づいて来て

いるのを感じた。1年半のゼミ体験で、仲間同士でお互いの考え方が近づいたのではないかと思った。

私は入学前には心理学科を目指していたくらい人間の心に興味を持っていた。結局、社会福祉学科に来たが、今までの授業でも支援が必要な人の気持ちを考えるような授業があり、それはそれで面白かったが、実際にすぐそこにいる人の気持ちを、その人の口から聞けることなど減多になく、このゼミに来るたびに、人の感情、考え方を自分で体感できて、とても勉強になり、人間への興味がさらに深まった。ゼミの中での先生の何気ない質問に、意外と深く考えさせられたり、自分を振り返させられたり、なんで自分はこう思うんだろうかと、自分の気持ちに気づかされることがよくあった。そのようなことができるようになるためには、どれほどの人を見ないといけないのだろうと思った。ゼミを受けて人の心に対する興味は減るところか、ますます強まった。

<コメント>

この学生は1年後の体験談でも深い洞察を述べているが、さらに深まっていることをうかがわせる内容である。自分の中の自己矛盾に苦しんでいた彼女が、多くの事例を観察するなかで、母子関係に具現化している様々な矛盾したところの動きとしてのアンビヴァレンスを直に感じ取るなかで、人間誰にでも息づいていることを実感し、自分のなかの自己矛盾にしっかりと向き合い、肯定的に捉えることができるようになっていく。これほどの自己理解が学部生に認められたことは感性教育の可能性を考えると、とても喜ばしいことである。

この学生は他にも私の担当科目を受講していたが、そのなかで、私が学生に示した様々な治療例（精神療法の実例）を読んでまとめるようにレポートを課すと、必ずと言っていいほど自分自身の体験を踏まえて考察を述べるほどまでになっている。大半の学生は書かれている内容を表面的に撫でるだけのまとめを報告するなかで、出色の出来栄である。このようなことは大学院生でも稀にしか見られないことで正直驚かされる。

「見えるもの、見えないもの、されど感じるもの」

F男

今回や、また、今回の事例に限らず「見えるもの、見えないもの、されど感じるもの」はたくさんあると感じている。

ゼミが始まって早いものでもう1年半が経とうとしている。その中で実に様々な母子の様子を観察してきた。それぞれの親子の特徴は様々で、その中に渦巻く感情は実に様々で、日常に当たり前のように存在するテレビドラマよりも壮絶でおかつ面白く、時に悲しく感じた。

そう感じる中で、まず「見えるもの」。これは母親、子どもの行動はもちろんだが、その行動の中の細かな表情だ。

次に「見えないもの」。それは「見えるもの」の中で見えた行動や表情の中に存在する様々な「感情」ではないか。その「感情」は実に複雑である。

「甘えたいが甘えられない」という、相反する感情・母親が自分のことをわかってくれないことに対する怒りや悲しみ、戸惑い。また母親の子どもに対する「なぜ自分の子どもがこうなのか」という苦悩や戸惑い。「見えるもの」の中にはこうした様々な感情が渦巻いている。これらはすべて「見えないもの」である。確かに表情としては「見える」かもしれない。だが、根底の部分に関しては決して「見えない」また「見る事が出来ない」ものではないだろうか。なぜならそれは、我々支援者や観察者はその「ドラマ」の主人公ではない。私たちはあくまで、母子という二人の主人公の行動や表情を感じ取り、理解し、より良い方向へと導くための脇役でしかない。その脇役たる役目を十二分に果たすために大切なことが「感じるもの」を「確かに感じる事」ではないか。

この1年半、様々な事例を観察してきた。最初は皆ありきたりな答えしか出てこなかった。全てを「甘えたくても甘えられない」、この言葉で片づけていた。しかし、時間を重ねるごとに「感じられる」ようになった。今ではしっかりと子どもや母親の言葉や表情、行動を細かく分析し、その意図をくみ取り、何パターンもの自分たちなりの解答を導き出している。私自身もそうだ。「甘えたくても甘えられない」の一言では終わらせず、自分自身の過去と向き合い、照らし合わせ、子どもの感情や母親の感情を推測することが出来るようになって

た。それをするによって私自身の人や物ごとに対する感じ方・考え方が変化するようになった。

これまでは「このような親であれば子どもがこうなっても仕方がない」と安易に考えていた。しかし、これは自分の力でどうすることも出来ない幼いうちだからこそ許される感情なのだ気づくことが出来た。なぜなら、私は「今の自分ならどのようにこのような状況を自らの力で変えられるだろうか」という視点も加えて観察をしているからだ。

「自分の家庭もこのような感じだったな」と感じるような事例もたくさんあった。以前はそんな事例を見て「じゃあ今の自分がこうなのも仕方がない」、このように考え、周りのせいにして、自分が変わることから逃げていた。そんな家庭環境を思い返し、両親に対し、怒り・憎しみ、それに似た感情を抱くこともあった。

しかし、今は違う。支援者の立場に立って考えることで、「自ら（の力）で自らを助ける・支援する」ように変化していった。確かに、私自身が生まれ育った環境、小・中学校と虐められ、暴力が当たり前だった世界で生きてきた環境、これは変わることはないし、変えることは決してできない。そんな環境が自分自身を創って来たのも事実だろう。しかし、このゼミを通して、他人を観察することを通して、「自分自身に置き換えて自分自身を助ける」、そんな術を身に着けることができた。それは「見えるもの・見えないもの・されど感じるもの」をしっかりと見極めることが出来るようになったからだろう。他人のことが理解できるようになると、自分自身のことも理解できるようになり、客観的に自分自身を見つめ、自分自身をも助けられるようになった。そこがこのゼミを通して人間的に大きく成長した部分ではないだろうか。

メンバーの話を聞いて

様々バックグラウンドを持つメンバーが集まる中で、あれだけの意見のぶつけ合いができたことに心から感謝をしている。育った環境が違えば、それぞれ考え方・感じ方が違うということが再認識できた。

これも私自身の話になるが、これまで「自分の意見が全て」という考え方を持っていた。この考え方を変えなかったがゆえに、周りの素晴らしい考えなど

にも耳を貸さずに損をしてきた。

このゼミでは否応なしに議論を重ねる。最初は「なんでその考えなん、意味がわからん」、こんな風に思っていた。しかし、回数を重ね、事例の難易度が上がるにつれ、その考え方が通用しなくなった。みんなの意見を聞かないと、より良い支援策や感じ方が出来なくなった。ここで初めて「肯定することの大切さ」を学ぶことが出来た。そこから自分自身の事例に対する見方はもちろん、人との接し方が変わったと思う。ここまで自分自身を成長するきっかけをくれたこのメンバーに心から感謝している。そしてそんな機会を下さった先生にも心から感謝の気持ちを伝えたい。ありがとうございました。

<コメント>

この学生の体験談の内容は実に深い。人間理解においていかに「感じ取る」ことが大切かを身を以て体験し、それをじつにわかりやすいことばで具体的に語っている。表現力も豊かである。

さらに驚かされるのは、自分自身の親子関係を振り返りながら、これまでの自分と感性教育を通して変化した自分を、「自分自身の過去と向き合い、照らし合わせ、子どもの感情や母親の感情を推測することが出来るようになった」と表現しているところである。

〔人間理解〕

G男

私はアルバイトで塾の講師をしているが、その際の生徒の表情をよく見るようになったと思う。

中学生では、この時期であれば、受験に対して不安そうだなとか、余裕をもっているとか、感じながら接している。また、小学生に多いが、宿題忘れたときにごまかそうとしているかもしれないと、表情を見ていればわかるなど改めて思う。授業中も何か言いたげなとき、以前に比べてわかるようになっている。具体的には、私の顔をちらちら見ていることに気づけるようになっており、学校生活であった楽しかったことや、つまらなかったことを生徒から聞き出すことができている。

そのほかにも、手遊びしていたら、ただ単に注意するのではなく、何か理由があるのではないかと考えるようになっていく。

アルバイトの期間は残りわずかだが、ゼミで学んだこと、考えさせられたことを少しでも発揮していきたいと思っている。

小林先生はよく家庭環境を考えて話をされているが、実習に行く前にゼミがあればよかったとも思っている。実習期間中は目の前の利用者のことで精一杯なので、色々な背景などを見るのが出来ていなかったと感じている。

これから社会に出ていく中で、様々な人と関わることがあると思うが、すこしでもその人のことを理解していきたい。

<コメント>

人間観察力が身についたことを具体的にアルバイトの体験を通して語っている。とてもわかりやすく、正直な体験談である。この体験談を読んで私のなかに生じたのは、感性教育を体験するまではどんなふうだったのだろうかという疑問である。私自身が大学生の頃どうであったか、定かには思い出せないが、大学生にとって人間観察と人間理解はまだまだ浅いものなのだろうということが読み取れる。その点からも感性教育が人間観察、人間理解、さらには自己理解に果たす役割の重さを思わずにはいられない。

V. 考察

今回の学生たちの体験談を聞くと、自分自身の体験の意味について、これまでにないほどに深い洞察を交えて語っていることがわかった。そこで今回特に印象的であった点に焦点を当てながら、感性教育の意義について考察する。

1. 自らの幼少期体験の賦活が幼少期の自分と現在の自分を繋ぐ—自我同一性の獲得—

まず取り上げたいのは、「見て、聞いて、話して」と「自分の中で変わったこと」と題したA子の1年後と1年半後の体験談である。1年後の体験談で、最初は母親ばかりに着目していたが、次第に「私も母親にこのようなことをされたことがある」と自分の幼少期のことを思い出すようになってから、子ども

の方にも焦点を当てて見るようになったという。過去の幼少期体験が想起されるようになるとともに、親子関係の理解が深まっていることを自らの言葉で率直に語っている。

さらに1年半後の体験談では、以前の自分は、誰かに自分の意見を言うことに怯えさえ感じ、いつも相手に合わせていたこと。そして、それが自分の家庭環境等も関係していることに気づいたことが語られている。

感性教育を体験することで、自分の幼少期体験が賦活化されるとともに、映像の親子と重ね合わせて理解するとともに、現在の自分が幼少期の自分といかにか繋がっているかを実感を持って理解できるようになったことをうかがわせる体験談である。

私はここに彼女が自分なりの同一性について深い理解に到達していると思われる。ライフサイクルの中で大学時代は自我同一性の獲得が大きな課題とされているが、その意味からも感性教育は学生の人格発達の促進に繋がるものだということができるように思う。

2. 内在するアンビヴァレンスへの気づきが深い人間観察力と他者への寛容な態度を生む

ついで取り上げたいのは、「意見のぶつかり合い」と「矛盾の塊」と題したE子の二つの体験談である。

E子は子どもの心の葛藤を強く感じ取ることができるようになるとともに、それが無意識に表情や声、さらには変な行動つまりは症状というかたちで表に現れることに気づいている。

彼女がなぜここまで深い人間観察力を身につけたのか。それは1年半後の体験談に示されている。「矛盾の塊」であった自分が感性教育を通して、誰にでも矛盾した心はあるものなののだとの気づきを得たことによって「今まで自分が人間に対して抱いていた考えはおかしくないと思うようになった」というのである。その結果、他者の振る舞いの中に矛盾があったとしてもそれを冷静に受け止めることができるようになっていく。

感性教育が、これほどまでに深い自己理解と人間観察力、さらには他者に対

する寛容な態度が生んだことに、私は深い感動を覚えずにはいられない。

3. 「感じるもの」を「確かに感じること」で自己理解と他者理解が深まる

ついで「見えるもの、見えないもの、されど感じるもの」と題した体験談を語るF男についてである。彼自身が述べているように、1年半のゼミの前半にみんなの前で彼が見せていた態度には「自分の意見が全て」という思いが強く表れていて、互いに理解し合うという対話にはなりにくかったのは確かである。

そんな彼がこの1年半でどのようにして変わっていったのか、その変化の過程がこの二つの体験談にとってもわかりやすい率直な語りで示されている。先入観を払拭すること、さらには見えないものに目を向けて感じ取るように努めたこと、その結果、「自分自身の過去と向き合い、照らし合わせ、子どもの感情や母親の感情を推測することが出来るようになった。それをするによって私自身の人や物ごとに対する感じ方・考え方が変化するようになった」という。

このような劇的な変化を生んだ大きな要因として、彼自身が「私たちはあくまで、母子という二人の主人公の行動や表情を感じ取り、理解し、より良い方向へと導くための脇役でしかない。その脇役たる役目を十二分に果たすために大切なことが『感じるもの』を『確かに感じること』ではないか」とも述べている。ここにも感性教育で私がねらいとしているものがその成果としてこのような明瞭なかたちで示されている。

4. 人間観察力が深まる

ついで「人を見る目が深まった」と題したB男の体験談を取り上げてみよう。彼は交友関係において人間観察力が深まったことをわかりやすく個人的体験として次のように語っている。

部活動をするなかで、ある人目を引く女子学生が自分にさかんにアプローチをしかけてきた。しばらくは反応しないで様子を見たが、あるとき勇気を奮って好意的な反応を見せたところ、途端に彼女は自分に対して距離をとるように

様変わりしたというのである。

彼が体験した独特な対人的振る舞いこそ私の主張する関係病理である「あまのじゃく」(小林、2015)である。感性教育を通して彼はそのことを実感として理解したことがわかる。まさに彼にとって「人を見る目が深まった」体験談である。感性教育が人間観察力を高めてくれる可能性をここにも見て取ることができる。

5. 他者の視点を獲得することで他者に対する警戒心が薄れる

感性教育が学生の人格の成長に大きな役割を果たしていることを実感させてくれたのが、「異なる意見も視点を変えることで納得できる」と題した体験談を語っているD男である。

非常に警戒的な構えが強く、見るからに強い緊張を抱かせ、将来どうなるだろうと心配の絶えない学生であった。彼自身も少人数形式のゼミに参加することがとても苦痛であることは一目でわかるような学生であった。しかし、彼はゼミを半年、1年、1年半と経験をつむにつれ、大きく変わっていったことで非常に印象に残る学生であった。周囲に対する強い警戒心は、自分を守ろうとして、自分の考え方に執着していたことをうかがわせるものであった。

しかし、同じ対象を観察しても人によってももの見方が異なることの発見と同時に、逆に一見同じように思えても、よくよく語り合うと見方が異なっているのだという発見を味わうことによって、他者の視点を獲得することができ、一見すると同じことを言っているようであっても、よくよく話し合ってみると、違いを発見したり、その逆に一見すると違っているようにであっても、よくよく話し合ってみると、深いところで共通していることを発見している。

感性教育での対話でもっとも重視していることは、相手の発言内容を丁寧に尋ね合うことで、相互理解を深めることにあるが、そのことの成果がこの学生の体験談にとってもよく見て取れる。

それまで頑なまでに自分を守るため、相手の意見を排除しようとしてきた彼が、視点を換えることによって相手をよりよく理解することができるようになったことを実感をもって語っていることに、私は深い感銘を覚える。彼の変

容は感性教育の最大の成果の一つである。

6. 正解へのとらわれから脱することができないのはなぜか

今回の感性教育では大半の学生に好ましい変化が認められたが、残念ながらC男の体験談に見られるように、正解へのとらわれから脱皮することが困難で、自分自身の内的体験として論じることが困難である学生がいることもわかった。

なぜ正解へのとらわれからの脱皮が困難であったのであろうか。1年後の体験談で彼は「先生の言葉が誘導を含んでいると自身が感じてしまったことがある。以降、自身は発言自体や講義に対して消極的になっていた部分があった」と述べている。

感性教育の参加者にとってある意味とてもつらいのは、アンビヴァレンスの強い母子交流場面を見ることによって、自ら幼少期に体験し、潜在化していたアンビヴァレンスが賦活化されることによって一時的に強い不安に襲われることがあるということである。感性教育を実施する際に気をつけなくてはならない点であるが、感性教育ではこのことをねらいとしているゆえ、避けて通ることはできない。なぜなら、幼少期のアンビヴァレンスの体験は大なり小なり誰にでもあるものであって、強い不安に襲われるのは、それに対するあまりに強い防衛が働いているゆえである。なぜならそれに触れる、あるいは他者に触れられることに対する強い恐れが生じるからである。

C男が私の語りかけに「誘導されたような」感じを受けたということは、それだけ彼自身にアンビヴァレンスによって生じた不安が強かったことがうかがわれるのである。時には迫害的な不安に襲われる学生もいるほどである。

自らの幼少期のアンビヴァレンスが賦活化された際に強い不安が生じるため、どうしてもそれに対して防衛的態度を取ることは少なからず感性教育を実施すると目にするものである。というよりも一時的な不安が生じるのは、ある意味感性教育ではねらっているところでもあるのだ。だから進行役の役割は非常に重いものがある。

しかし、その一方で、E子のように、同じような私の語りかけを「先生の何

気ない質問に、意外と深く考えさせられたり、自分を振り返させられたり、なんで自分はこう思うんだろうかと、自分の気持ちに気づかされることがよくあった」と肯定的に受け止め、内省的態度で深く考えるようになっている学生もいる。

こうしてみると、進行役である私の語りかけが学生たちに肯定的に響くか、それとも被害的に響くか、それは学生たちの内面の不安のありようと深く関わっていることがわかるのである。このように感性教育では学生の幼少期体験が賦活化されることによって、強く内面が揺さぶられることがある意味必ず起こると考える必要がある。進行役の力量が問われるのはそのためである。

7. なぜ感性教育は大学生の人格発達を促進するのか

感性教育で私が特に心がけていることの一つは、対話の過程で、学生の本音（無意識の心の動き）は、ほんの些細なからだの動きや何気無いつぶやきや振る舞いに現れているゆえ、それを見逃さず、丁寧に扱うことを大切にしていることである（小林、2019）。このことは学生の体験談によく示されている。たとえば、A子は「必ず自分の意見や気付いたこと等を皆に発言する機会があります。自分の声が小さかったり、言っている意味がよく分からなかったりすると、先生はそれをすぐに言葉にしますので、尋ねられる前に、皆に伝わるように、聞き取れる音量で、分かりやすく、しかし、簡潔に言葉をまとめて発言することを心がけるようになりました。また、自分の意見を毎回必ず発言するので、『自分の意見』を言うことに躊躇しなくなりました。」と述べている。

彼女の場合、当初は自分の感想を発言すること自体に強い怯えがあったこともあり、自分の言いたいことが容易には言葉にならなかったのだが、彼女のためらう気持ちを察しつつ、つぶやきを丁寧に掬い上げながら、その真意を少しずつ言葉に紡いでいくという対話を繰り返すことで、発言することへのためらいがなくなったのであろう。このことがゼミの修了時の感想として『『自分の意見を相手に伝える』という一見当たり前なことに気付いて、本当に良かったです。』という発言となって示されている。

さらにE子は進行役としての私の意図を察しているかのように、「ゼミの中

での先生の何気なさそうな質問は、意外と深く考えさせられたり、自分を振り返させられたり、なんで自分はこう思うんだろうかと、自分の気持ちを気づかせられることがよくあった。」と率直な感想を述べている。まさに彼女の無意識への気づきが促されたことがよく示されている。

同じくE子の体験談で驚かされるのは、1年後に「子どもでもいろんな思いが心の中であって、それを素直に伝えるすべがなく、無意識に表情や声、または大人から見ると『変な行動』をしてしまうこともわかった。」と述べていることである。子どもの些細な表情や声の調子、さらには行動にこころの動きが如実に示されていることに気づいている。このことは、子どもの無意識が些細な言動に示されていることへの気づきと同時に、自分自身の何気ない振る舞いに己の無意識が現れていることにも気づいているということである。

さらに1年半後には母子双方のアンビヴァレンスのありように気づかされるとともに、そこに自分の矛盾、つまりは自らのアンビヴァレンスと同様にこころの動きを発見したのであろう。このようにしてE子は自身の内面に蠢き、これまで自分を苦しめていたアンビヴァレンスというこころの矛盾した動きに向き合うことができるようになり、それを誰にでもあるものとして肯定的に受け止めることができるようになったことがE子の体験談に実にわかりやすく正直に述べられている。

このE子の体験談の気づきは、私の実践している精神療法の核心と言っているものである。私が患者に自らの何気ない振る舞いにこころの動きが反映していることへの気づきを促していることを考えると、この学生の気づきは、まさに精神療法で私が求めている患者の気づきと同じであることがわかる。その意味からすれば、正直いい意味で驚きを禁じ得ないのである。感性教育で私が学生と対話する際に心がけていることは、私の実践している精神療法での面接で核心と考えていることと本質的には同じものだと考えているからである。

おわりに

当初感性教育は臨床家を養成するためにぜひとも必要であるとの思いから、臨床家を目指す学生を対象に実施してきたが、今回は卒業後一般企業に就職す

る学生相手に実施したものである。最初私自身学生の反応がどうか気かけながら実施したが、学生たちは思いの外熱心に取り組み、次第に彼らの観察眼が目に見えて深まっていくのがわかるようになった。そして今回の体験談に示されたように、彼らは自らの人格の成長を実感するほどに充実した時間を体験したことがわかった。

このことは一体何を意味するのであろうか。一つには、何を志す学生であろうと、誰もがこれまでの人生経験を通して様々な心理的葛藤を抱え込んで生きてきたということである。感性教育を通して、学生たちはそうした心理的葛藤に予期せず向き合うことになったのではないか。そして、自らの人生を、観察した母子の生き様と重ね合わせることによって対象化し、自らの課題として取り組んだ結果、人格の成長と発達が促されたのではないかと考えられるのである。

感性教育で学生たちと向き合う際の私自身の態度は、精神療法でのそれと質的に同じものを感じていたが、今回の学生たちの体験談は、そのことをいみじくも示しているのではないか。今日の学生たちは教育に何を求めているか、また彼らへの教育はどうあるべきか（小林、2019b）。今回の結果は私たち大学教員に多くの示唆を与えているように思えてならない。

謝辞 本研究を通して、学生たちは実りある体験をしたことがわかったが、私も学生たちの体験談から多くのことを学んだ。率直な体験談を寄せてくれた学生たちに感謝するとともに、卒業後に今回の体験が彼らの生きる力となることを心から願っている。

文献

- 小林隆児 (2014). 「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム—「甘え」のアンビヴァレンスに焦点を当てて—. ミネルヴァ書房.
- 小林隆児 (2015). あまのじゃくと精神療法—「甘え」理論と関係の病理—. 弘文堂.
- 小林隆児 (2016a). 2015 年度後期教育インキュベートプログラム「臨床能力向上のための録画ビデオを用いた感性教育の試み」報告書. 2016. 3. 20. 私家版
- 小林隆児 (2016b). 発達障碍の精神療法. 創元社.
- 小林隆児 (2017a). 2016 年度前後期専門演習「臨床能力向上のための録画ビデオを用いた感性教育の試み (その 2)」報告書. 2017. 2. 15. 私家版

- 小林隆見 (2017b). 臨床力を高めるための感性教育 (研究叢書 No.42). 西南学院大学学術研究所.
- 小林隆見 (2017c). 臨床家の感性を磨く—関係をみるということ—. 誠信書房.
- 小林隆見 (2018a). なぜ「感性教育」は学生に深い自己洞察をもたらすか. 西南学院大学人間科学論集, 13(2); 215-243.
- 小林隆見 (2018b). なぜ多くの学生が母子間のアンビヴァレントな情動の動きを感じ取ることができないか—「感性教育」の新たな試み—. 西南学院大学人間科学論集, 14(1); 279-318.
- 小林隆見 (2018c). 常識 common sense を疑い、共通感覚 sensus communis を呼び醒ます—「感性教育」の目指すもの—. 西南学院大学附属臨床心理センター紀要, 創刊号, 2-7.
- 小林隆見 (2018d). 臨床家にとっての初期体験の重み. そだちの科学, 31, 96-98.
- 小林隆見 (2018e). 「教えられる」学びから「気づく」学びへ——感性に働きかけることはなぜ学生のところに響くか——. 西南学院大学学生相談報 2017 年版, 第 30 号, 4.
- 小林隆見 (2019a). 大学新生を対象としたアクティヴ・ラーニングとしての「感性教育」の試み. 西南学院大学人間科学論集, 14(2); 161-217.
- 小林隆見 (2019b). アクティヴ・ラーニングとしての「感性教育」は大学生にとってどのような学びの体験か? 西南学院大学人間科学論集, 15(1); 181-225.

西南学院大学人間科学部社会福祉学科